

Title	非定常系におけるランジュバン方程式の一般化と揺動散逸定理 (確率過程論と開放系の統計力学 II)
Author(s)	古川, 浩
Citation	数理解析研究所講究録 (1980), 405: 52-57
Issue Date	1980-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/102339
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

非定常系におけるランジュバン方程式の一般化と揺動散逸定理

山口大 教育 古川 浩

揺動散逸定理¹⁾は熱平衡状態の近傍における巨視的な系のふるまいと微視的な自由度のゆらぎとの関係を与える。このことが揺動散逸定理の統計力学における重要性になっている。揺動散逸定理は又1種、又2種と分類されるが、ここでは又2種、すなわちランジュバン方程式に関連した揺動散逸定理の拡張を述べてみたい。ランジュバン方程式は1908年ランジュバンによって導入されたものでブラウン粒子の速度 u の従う方程式を単純化したものである。

$$\frac{d}{dt} u(t) = -\gamma u(t) + f(t) \quad (1)$$

ブラウン粒子の不規則な変化はランダム力あるいは揺動力、 f 、で表現されている。おちには γ と f との間に

$$\langle f(t) f(t') \rangle_0 = -2\gamma \delta(t-t') \quad (2)$$

なる関係が存在することが明らかとなったが、これが又2種揺動散逸定理と呼ばれているものである。1950年代に我が国で線型不可逆過程の理論がいちじるしい発展を見た。又

2 種揺動散逸定理の一つの完成と見て²⁾。非平衡状態での揺動散逸定理がどれだけ重要又は有用かは明らかではないが、何らかの利用方法があることを期待して拡張を試みた。Mori 型あるいは convolution 型, あるいは convolutionless 型のランジエバン方程式あるいはその他の型が可能であるが簡単のため convolution 型のランジエバン方程式について述よう。非平衡状態では物理量のゆらぎ A_t に対して

$$\frac{d}{dt}A_t = K(t,t)A_t - \int_{\mu}^t \varphi(t,\tau)A_{\tau}d\tau + f(t,\mu), \quad (3)$$

と拡張出来る³⁾。ここで $K(t,t)$ は Mori 方程式の frequency マトリックス $i\omega$ に対応する。非定常系であるから揺動力 f は積分の下限 μ に直接依存する。Mori に従って

$$\langle f(t,\mu)A_{\mu}^* \rangle_0 = 0 \quad (4)$$

とおく。ここで $\langle \rangle_0$ はアンサンブル平均である ($\langle A \rangle_0 = 0$) が、分布は $t=0$ における初期分布である。積分の下限である時刻 μ は $\mu \geq 0$ 。 $t=\mu$ とおいて (3) と (4) より

$$K(t,t) = \left\langle \frac{dA_t}{dt} A_t^* \right\rangle_0 \left\langle A_t A_t^* \right\rangle_0^{-1} \quad (5)$$

がただちにわかる。(3) を μ で微分して

$$\frac{d}{ds} f(t, s) = -\varphi(t, s) A_s \quad (6)$$

(4) を s で微分して (6) を用いて

$$\left\langle f(t, s) \frac{dA_s^*}{ds} \right\rangle_0 - \varphi(t, s) \langle A_s A_s^* \rangle_0 = 0 \quad (7)$$

$dA_s^*/ds = A_s^* K(s, s) + f(s, s)$ であるから, (7) は

$$\varphi(t, s) = \langle f(t, s) f^*(s, s) \rangle_0 \langle A_s A_s^* \rangle_0^{-1} \quad (8)$$

すなわちこの関係は Mori²⁾ によって導かれた関係 (揺動散逸定理) の拡張となっている。上の議論は projection operator を用いることによりもう少し見通しよくすること⁴⁾が可能である。

$$P_s(t) G \equiv \langle G A_s^* \rangle \langle A_t A_s^* \rangle^{-1} A_t \quad (9)$$

によって projection operator $P_s(t)$ を導入しよう。すると (3) は次の二つの方程式に分解される。

$$\frac{d}{ds} f(t, s) + P_s(t) \Lambda'_s f(t, s) = 0 \quad (10)$$

$$f(t, t) = (1 - P_t) \frac{d}{ds} A_t, \quad (P_t \equiv P_t(t)) \quad (11)$$

ただし

$$\Lambda'_s G \equiv \frac{d}{ds} P_s(t) G \Big|_{t=s}$$

(10) 式を ρ で積分して (3) が得られる。このとき (8) 式が満足される。又、(10) は f に対する線型方程式であるから形式的に解くことが出来て f の $P_2(t)$ による表現を与える。

B_t と A_t の汎関数として

$$\tilde{P}_2(t) G \equiv \langle G B_\rho^* \rangle_0 \langle B_t B_\rho^* \rangle^{-1} B_t \quad (9')$$

を導入する。(10) 及び (11) で $P_2(t)$ のかわりに $\tilde{P}_2(t)$ を用い、 f を \tilde{f} とおき換えればこれによって得られるランジュバン方程式は非線型で

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} A_t = & \tilde{P}_t \frac{d}{dt} A_t - \int_\rho^t \langle \tilde{f}(t, \tau) f^*(\tau, \tau) \rangle_0 \langle B_\tau B_\tau^* \rangle^{-1} B_\tau d\tau \\ & + \tilde{f}(t, \tau). \end{aligned} \quad (12)$$

これは Mori-Fujisaka⁵⁾ の導いた方程式の拡張となっている。(12) の f は (3) の f である。(8) が物理的にも揺動散逸定理と同じ意味をもつことは次のようにしてわかる。いま

$$\langle f(t, \tau) f^*(\tau, \tau) \rangle_0 = 2D(t) \delta(t-\tau) \quad (13)$$

と仮定してみよう。そのとき

$$2D(t) \equiv D(t) + D^*(t) = \lim_{\tau \rightarrow t} \frac{1}{t-\tau} \int_\tau^t \int_\tau^t \langle \frac{dA_{t'}}{dt'} \frac{dA_{t''}^*}{dt''} \rangle_0 dt dt' \quad (14)$$

となる。⁶⁾ (14)のような行列 D に対して、任意のベクトル ξ で作った二次形式 $\xi^* D \xi$ は非負である

$$\xi^* D \xi \geq 0. \quad (15)$$

(13) を使えば (3) は

$$\frac{d}{dt} A_t = [K(t, t) - Q(t) \sigma(t)^{-1}] A_t + f(t) \quad (16)$$

と書き換えることが出来る。ここに $\sigma(t) \equiv \langle A_t A_t^* \rangle_0$ は Variance Matrix。さて Variance $\sigma(t)$ は系の性格を決める大切な量である⁶⁾、これは次の式に従うことがわかる。

$$\frac{d}{dt} \sigma(t) = K(t) \sigma(t) + \sigma(t) K^*(t) + 2D(t), \quad (17)$$

ここに

$$K(t) \equiv K(t, t) - Q(t) \sigma(t)^{-1}.$$

(16) 及び (17) を用いることによって

$$\phi(t) \equiv \langle A_t^* \rangle \sigma(t)^{-1} \langle A_t \rangle \quad (18)$$

$$\langle A_t \rangle \equiv \langle A_t A_0^* \rangle_0 X, \quad (19)$$

ここに X は任意のベクトル、で定義された量 $\phi(t)$ は

$$\frac{d}{dt}\phi(t) = -2\langle A_t^* \rangle \sigma(t)^T D(t) \sigma(t)^T \langle A_t \rangle \leq 0, \quad (20)$$

となる。おなじく擾動力 f が存在することによってある種の散逸が起っていることになる。

参考文献

- 1) R. Kubo, Reports on Prog. Phys. 29 (1966) Part I, 255.
- 2) H. Mori, Prog. Theor. Phys. 33 (1965), 423.
- 3) H. Furukawa, Prog. Theor. Phys. 58 (1977), 1127.
- 4) H. Furukawa, Prog. Theor. Phys. 62 (1979), 70.
- 5) H. Mori and H. Fujisaka, Prog. Theor. Phys. 49 (1973), 764.
- 6) H. Furukawa, Prog. Theor. Phys. 56 (1976), 464.